

参考文献

- 稲野彰子 1991「大木式土器にみられる球胴形深鉢について」『北上市立博物館研究報告書』第8号
 今村啓爾 2010『土器から見る縄文人の生態』同成社
 柏倉亮吉・江坂輝弥 1955『吹浦遺跡』サイエンス社
 北野博司 2009「押出遺跡の土鍋の作り分けと調理」『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』

(2) 滝ノ沢遺跡における縄文土器の編年(第339～367図)

これまで述べてきたように、今回の調査では出土状況に基づいて土器を分類するのは難しい。したがって既存の編年に従って分類せざるを得ない。今回出土した土器のほとんどは大木6式～大木7a式で、この時期の編年は近年今村啓爾氏が詳細に扱っており(今村 2010)、本書ではこれに従って比較的残りの良い土器を並べることとした(第339～367図、一部他時期の土器含む)。この時期には、宮城県嘉倉貝塚等の出土状況に基づいた編年があるが(千葉 2007)、型式学的検討が少なく、これに基づいて資料操作するのは難しい。変遷の方向に限れば今村氏の編年をほぼ支持している。また、大木6式については、松田光太郎氏の層位的事例を重視した編年もあるが(松田 2003)、ややわかりづらくて、やはり資料操作は難しく、何より大木7a式については細かく扱っていない。

単純にわかりやすく資料操作しやすいという点で今村氏の編年に従った部分が大きいため、その妥当性にまで目配りできているわけではない。実際に資料操作してみて、氏の5期を峻別するのは難しく、一つの独立した型式足りうるのか疑問を持ったことも確かである。ともあれ、氏の編年に従った結果、今回の出土土器は大木6式3期とその前後が多いことがわかった。これまでの滝ノ沢遺跡出土土器をみると、地点の離れた2005年度調査区(第Ⅱ章文献146)は別にして(大木8a式が多い)、ほぼ同様の傾向が認められるようだが、1990(第Ⅱ章文献100)、2001・2002年度調査区(第Ⅱ章文献130)では、大木7a式土器が目立つ。若干の地点差があり、南にいくほど新しい土器が多くを占める傾向があるのだろうか(第6図)。

参考文献

- 今村啓爾 2010『土器から見る縄文人の生態』同成社
 千葉直樹 2007「宮城県における縄文時代前期後葉の土器に関する一考察」『考古学談叢』六一書房
 松田光太郎 2003「大木6式土器の変遷とその地域性」『神奈川考古』第39号 神奈川考古同人会((財)かながわ考古学財団内)

(3) 滝ノ沢遺跡における玦状耳飾(第381図)

(a)資料

今回の調査では、8点、明らかな未成品も8点出土し、これまでの調査では、35点(±土製1)(第Ⅱ章文献87に25点、99に2点、100に1点±土製1、130に5点、52に2点掲載)出土している。

滝ノ沢遺跡出土玦状耳飾の平面形は、一般に広く知られる(川崎 2004、日本玉文化研究会 2010、福田 2006)円形(第381図33)や三角形(第Ⅱ章文献87:実測図版42の33、35、46)もあるが、長く、糸切鋏状を呈するものが多い(第381図34、35ほか)。在地のものであろうか。

石質。北上市教育委員会調査分については未鑑定のもものがほとんどだが、第Ⅱ章文献99の長楕円形2点は、砂質泥岩、泥岩と観察表にある(同文献:p.61)。当センター前回調査分(第Ⅱ章文献52)の楕円形?の2点は、北上山地産の滑石とされた(p.297)。今回調査分は、一般的な円形の第381図33は、北上山地(早池峰山地周辺)産ではあるが蛇紋岩、凝灰岩製の3点は、第381図34、38が長形、40が円形?と様々で、滑石製の4点(第381図35、36、37、39)は、概ね長形で一致する。明らかな未成品の8点は、孔を持たない長楕円形の1点(第381図47)が頁岩の他は凝灰岩である。

(b)時期

今回調査品を中心に滝ノ沢遺跡出土玦状耳飾の時期を推測したい。残念ながら調査結果から時期を推測できる状況にないので、既存の編年に頼らざるを得ない。玦状耳飾は全国に認められ、全国的な編年が作成されているが（川崎 2004ほか）、近年では地域性も指摘され（国重 2001ほか）、南九州では全国的な編年に合わない傾向も指摘されているという（川崎 2004：p.20）。ここでは、そうした点にも配慮しつつ、時期を推測していきたい。なお、以下では、論文掲載資料については、その論文を引用し、報告書等の原典は省略させていただく。

まず一般的な円形から（第381図33）。33は、環状から貫通孔へ移りつつあり、切れ目は長めだが間は狭い。川崎保氏の編年（2004）では円盤形に相当すると思うが、前期中葉～中期初頭と長く位置づけられている。もう少し限定したいので類例を探すと、青森県館野遺跡の土坑墓出土例（福田 2006：図1の6）、秋田県上ノ山Ⅱ遺跡出土例（秋田県教育委員会 1988：第236図841）、宮城県北原街道B遺跡例（日本玉文化研究会 2010：p.87の5）、長浜例（日本玉文化研究会 2010：p.89の1）、新潟県吉峰遺跡例（日本玉文化研究会 2010：p.12の中段141）などを見つけることができた。館野遺跡例は前期末大木6式併行期、長浜例は前期後葉の周辺、吉峰例は前期後葉とされている。

これらの見解を総括すれば前期後葉～末と広く位置づけられることになるが、福田友之氏の館野例の位置づけには疑問がある。館野例は土坑墓出土例だが、他に遺物が出土せず、その位置づけの根拠は「類例が岩手県清水ヶ野7号土坑の大木6式期例にあり、前期末葉であろう」（福田 2006：p.20）というものである。確かに、清水ヶ野例は、土坑内出土土器および調査出土土器の傾向から大木6式期の可能性が極めて高いが（第Ⅱ章文献46）、玦状耳飾自体は館野例とは異なり角張っている。

ここで、円形は“大木6式期になると角張る”のではないかという仮説が得られる。清水ヶ野例以外に大木6式と特定された例を見つけられなかったのも、はっきりしないが、僅かな大木5式土器片を除いて6式以降がほとんどを占める岩手県北上市横町遺跡では、39点の玦状耳飾が出土しており（第Ⅱ章文献42、141）、角張ったものや長いものがほとんどを占める。前述の上ノ山Ⅱ遺跡の調査では「大木4・5式を主体」（秋田県教育委員会 1988：p.409）としている。前期では大木4式までしか出土していないらしい岩手県新田Ⅱ遺跡では、玦状耳飾が50点出土しており、楕円形基調のものは認められるが、角張ったものはないようである（遠野市教育委員会 2002）。

山形県押出遺跡には、これまで見てきた円形の滝ノ沢例（第381図33）に近い出土例がある（日本玉文化研究会 2010：p.74の8、9）。しかし、より正円に近く、切れ目はあまり長くなく滝ノ沢例より環状に近い。押出遺跡は大木4式古段階の単純遺跡とされ、これらと大木6式期の清水ヶ野例の間に滝ノ沢例を挟むと、円形環状から角張った形態への系統的変遷が窺われるが、事はそう単純ではない。押出遺跡からは破片ではあるが角張った形のものが出土しているからだ（日本玉文化研究会 2010：p.74の10）。岩手県大清水上遺跡は、前後の時期は含むが大木5式土器がほとんどを占める遺跡で（第Ⅱ章文献54）、11点出土した玦状耳飾は、確かに円形基調がほとんどを占めるが、第215図384は方形基調と見做さざるを得ないだろう。ただし全て破片で不明瞭な部分を残す。宮城県北原街道B遺跡からは、前述の例以外にも玦状耳飾が二点出土しており、そのうち1点が出土状況から大木5式に特定され（日本玉文化研究会 2010：p.87の6）、破片ではあるが明らかに角張っている。むしろ前述の円形例は二次的な堆積層出土のため「大木5式には特定されない」（同：p.82）。

このように、“大木6式期になると角張る”という仮説は危うい点を持つ。しかし、大木6式より古く明瞭に角張る例は、ほとんどが破片であることから、“未成品のため角張っている”のではないかと考えることもできる。“未成品”と言うより製作途上の失敗品で、大まかな成形はしたが、研磨して丸くする途中で割れてしまったために角張っているのではないかと。大まかな成形段階では角張

っているなら、手違いで角張ったまま完成品とされてしまう場合もあったかもしれない。今後、識者の詳細な検討を待ちたいが、とりあえず本書では、この仮説を元に論を進めたい。

今回出土した円形以外の時期。既にこれまでの検討で、長いものは大木6式以降の可能性が高いことがわかる。山形県出土の玦状耳飾を集成した小林圭一氏は、「前期末葉では・・（中略）・・が該当し、楕円形が特徴となる」と述べている（日本玉文化研究会 2010：p.73）。中期前葉大木7a式期の玦状耳飾については、宮城県出土分を集成した相原淳一氏が、出土状況から大木7a式と指摘したものは全て長いものであり（日本玉文化研究会 2010：p.83）、青森県分を集成した福田友之氏は、Ⅲ類とした縦長長方形のものは、全て中期に位置づけている（福田 2006：p.20）。

楕円形基調からどの程度伸びたら中期前葉に位置づけられるのか、答えを出すような出土例を今回は見つけることができず、また、福田氏によれば、縦長長方形は中期後葉の初めあたりまで存続するようで、時期の限定は難しいが、縦長長方形が中期になるのは間違いなさそうである。そうすると、今回出土品の中では、第381図34は中期に間違いなく、38も、その可能性が高い。土器の出土傾向から、中期前葉大木7a式期に収まる可能性が高いであろう。残りは小片が多く難しいが、その多くが楕円形基調で、それほど長くなく、前期末大木6式期に位置づけられそうである。40は、丸みが強く前期後葉大木5式期まで遡るかもしれない。

以上の位置づけが正しいとすれば、各期の点数は概ね土器の出土傾向を敷衍するので、実態からかけ離れているとは考えにくい。今回出土品中最も古い第381図33だけが完形で石質も蛇紋岩という良い？石を使っており搬入品の可能性もある。搬入品で貴重品だからこそ最後まで壊れなかったと考えることもできる。以後急速に在地化したため石質も珍しくない破片が多くなるのかも知れない。

最後に今回以外の調査で出土した滝ノ沢例を概観しておく、意外なほど形態が偏っていることに驚く。今回のように円形や縦長長方形はなく、前項で述べた三角形基調のもの（第Ⅱ章文献87：実測図版42の33、35、46）を除けば、楕円形や隅丸長方形（縦長長方形より寸詰まりなもの）しかない。出土土器は、今回同様に大木5式や大木7a式も見られるのに、やや不思議である。

取りあえず、これまで扱っていない三角形の時期について検討したい。前述の川崎氏の編年では、前期末～中期初頭とやはり広くとらえている。福田友之氏は、より細かい位置づけを試みたが、出土状況からは区分できないとして結局従来通りの広い位置づけに留まっている（福田 2006：p.21）。相原淳一氏が、出土状況から「大木7式と考えてよいもの」とした宮城県長根貝塚出土例（同：p.90の4）があり、明確に位置づけられたのが一点しかないので無理があるが、滝ノ沢例と比較してみる。滝ノ沢例の1（第Ⅱ章文献87：実測図版42の33）は、下端が長根例の方が若干広いが割とよく似ていると言える。3（第Ⅱ章文献87：実測図版42の46）は、さらに下端が狭く縦長の印象が強い。2（第Ⅱ章文献87：実測図版42の35）は寸詰まりで、切れ目も短い。これらの形の違いが単なる個体差なのか時期差なのか、今後の検討によるところが大きい、円形→楕円形→縦長長方形の変遷に同調しているとすれば、切れ目が短い方が古い可能性がある。

なお、本遺跡出土の楕円形や隅丸長方形（縦長長方形より寸詰まりなもの）は、玦状耳飾の円形→楕円形→縦長長方形の変遷と出土土器の傾向から、大木6式期に位置づけられるものが大半を占める可能性が高い。そうすると、本遺跡の場合、出土土器の傾向から、中期前葉に残るのが今回調査の縦長長方形だけだと少なすぎるので、三角形の多くが中期に下る可能性も考慮する必要がある。

(c)前期末・東北地方北部における玦状耳飾の変化

前項で在地化云々といったが、楕円形という平面形自体は一般的なもので、前述の川崎氏の編年図にもあり、古く樋口清之氏がB類としたものである（樋口 1933）。このB類は、隅丸長方形に近く、

上述の清水ヶ野例に極めてよく似て、清水ヶ野例（の特に切れ目）がやや伸びた形に相当し、B類がさらに伸びて方形基調になると樋口氏のA類となる。つまり、上述の円形→楕円形→縦長長方形の変遷に合致するが、A類は、縦長長方形とB類の中間的な形をしている。

清水ヶ野例は、石材が「翡翠？」とされており（第Ⅱ章文献46：p.233）、搬入品の可能性が高い。ほぼB類そのものが、岩手県塩ヶ森Ⅰ遺跡から出土しており（（財）岩手県埋蔵文化財センター 1982：図版248の4、5）、このうち4は、北上山地産ではあるが蛇紋岩である（同：p.158）。

“在地化”は、石材と形の細かい変異に現われているのではないと思われるのである。三角形という基本形は、上述の円形の流れの中では現れてこないが、やはり樋口氏がE、F類として古くから取り上げており、分布も広く一般的な形であるので（國重 2001：図8）、どこかで円形→三角形という漸移的变化が起こった可能性が高い。在地化が石材に現れるというのは、本節冒頭に述べた滝ノ沢遺跡での未成品とそれ以外での石材の違いを見れば一目瞭然である。蛇紋岩と滑石に対して、凝灰岩と頁岩（泥岩も？）が在地の石材である可能性が高い。当センター前回調査分の滑石製品の一つ（第Ⅱ章文献52：第193図1352）には補修孔が開けられ、搬入品である可能性を示唆する。今のところ滝ノ沢遺跡では楕円形の蛇紋岩あるいは滑石製品が明瞭な形では確認できていないが、第Ⅱ章文献87の実測図版42の28、31、39、第Ⅱ章文献130の実測図版14の25の楕円形例には、補修孔が開けられているので、蛇紋岩あるいは滑石製品の可能性を残す。

材質の変化は、山形県で大木6式期に土製の玦状耳飾がまとまっている（日本玉文化研究会 2010：p.75）点も関係するのかもしれない。全て円形で、同時期の石製の形と符合しないが、ここでは、円形という形に固執した後代の在地の人間が敢えて土で造り出したものと解釈しておきたい。ちなみに、滝ノ沢遺跡出土例（第Ⅱ章文献100：実測図版56の59）も、時期は不明だが円形である。宮城県長根貝塚では中期初頭の三角変形が出土している（日本玉文化研究会 2010：p.90の5）。

楕円形（樋口氏のB類）は、「大木式土器分布圏を中心とし、凝灰岩のものと滑石のものが多い。他の地域ではほとんど出土しないのが特徴」（國重 2001：p.22）で、三角形の「E類は、円筒土器分布圏にその中心を持つが、広域に運ばれるような存在であった」らしい（同）。前述のように、三角形の出現が中期に下る可能性もなくはないが、基本的には東北地方（北部）の玦状耳飾は前期末に地域性が強くなり、北の円筒圏では三角形、南の大木圏では楕円形、山形県ではさらに土製も加わる。さらに、それぞれの地域内でも在地化が著しくなり、在地の石材を積極的に使い、細かな形の変異が現れるようになる。滝ノ沢遺跡で玦状耳飾が作られるようになったのは、この時期と思われる。

(d)製作（第381図）

滝ノ沢遺跡で在地の石材（凝灰岩、頁岩）を中心にした玦状耳飾は、まず（球形の）素材石を“三枚に下ろす”ようなやり方で三つ（以上）に割って平坦面を作り出す。次に研磨して大まかな形に成形する。片側に寄った場所に両側から穿孔し（第381図下段右端46）、穴から反対側に向かって何度もなぞるようなやり方で溝を切り（第381図下段右端41）、最後に研磨して整形しているのだと思われる。第381図は、第278～281図の一部を製作順に並べ直したものである。

上述のように、蛇紋岩と滑石は、北上山地にも産地があり、綾織新田（新田Ⅱ）遺跡（遠野市教育委員会 2002）や大中田遺跡（第Ⅱ章文献49）では、近くで良質な滑石が算出することから（高木 2005：p.46）、滑石製の未成品が出土し、特に大中田遺跡は「生産拠点である攻玉遺跡と捉えることができる」（高木 2005：p.47）。石材が硬いためか、未成品は細片であり、滝ノ沢遺跡のそれとは大きく異なっている。しかし、堀江武史氏によれば（1992）、製作工程自体は、“三枚に下ろす”点とはともかく、滑石でも大きな違いはないようで、違いは石材の性質（硬軟等）による加工のしやすさ

に過ぎないようだ。ただし、製作の難易は、研磨効果において逆転して現れることは言うまでもない。

(e)流通・岩手県内他遺跡との比較

前述のように、滝ノ沢遺跡からは以前三角形の玦状耳飾が出土しており（第Ⅱ章文献87：実測図版42の33、35、46）、三角形は円筒土器分布圏に中心を持つので（（國重 2001：p.22））、搬入品の可能性も出てくる。石質は不明だが、三角形三点のうち二点に補修孔が見られ（前掲：35、46）、補修して使用された点が傍証となるかもしれない。円筒圏からの搬入あるいは影響が明瞭に読み取れるのは土器である。一部上層 a 式の可能性のあるものもあったが、大部分は下層 d1 式であった（第Ⅴ章参照）。本遺跡の三角形は中期に下る可能性を指摘したが、土器との整合性を考えれば、主体は前期末にあると考えるのが自然である。時期幅があるとしたら、切れ目が短い（第Ⅱ章文献87：実測図版42）の35が古く、他の2点は、大木6式の終わりのころ、あるいは中期まで下るのかもしれない。

岩手県や隣の秋田県においては玦状耳飾の集成がなされていないようであり（岩手県南部に限れば第Ⅱ章文献46）、概要が掴めず、これまでの検討が的外れである恐れがあるので、最後に、岩手県内で比較的まとまって出土した同じころの他遺跡と比較してみたい。近いところから見ていく。

第2表gの北上市鳩岡崎上の台遺跡では、東北自動車道の調査で十点弱の完成品と数点の未成品が出土した（第Ⅱ章文献9）。出土土器は滝ノ沢遺跡と重なる部分が多いが中期前葉も多い。楕円形を主とするようだが、三角形らしきもの（同：第8-1図34）や縦長長方形（同：第8-1図38）もあり、三角形の石材が滑石、縦長長方形が凝灰岩である点は、滝ノ沢遺跡の傾向に合致するが、凝灰岩以上に滑石（「宮守村？」産とされる）が多く、明らかな未成品（同：第8-1図30）に滑石があるのも不都合である。第2表bの横町遺跡でも多数出土したが、石質が不明である（第Ⅱ章文献141）。第Ⅱ章で紹介した北上山地に近い旧江刺市宝性寺跡では、8点出土した（第Ⅱ章文献50）。出土土器は、大木6式前後の方が多くようだ。耳飾は全て破片で不明瞭な点を残すが、楕円形がほとんどか。石材は、頁岩と滑石の両方あるが、滑石が多く、明らかな未成品も含む（同：第302図2770）。第Ⅱ章でもふれた北上山地中の旧江刺市中田遺跡は、数十点出土したが全て滑石製の未成品で小片が多くほとんどが全体形不明だが、明確な縦長長方形の他楕円形、円形らしきものも認められる（第Ⅱ章文献49）。出土土器は、前後の時期を含むが大木6式がほとんどである。同じく第Ⅱ章で紹介した奥羽山脈に近い旧湯田町峠山牧場Ⅰ遺跡の本調査では、12点掲載されている（第Ⅱ章文献45）。土器は大木5～6式前半が多く掲載されているようだが、耳飾は円形から縦長長方形まで見られる。滑石、凝灰岩製も多いが、流紋岩が多いのが特徴で、縦長長方形に凝灰岩が多く、滑石が円形に多いらしいのは滝ノ沢遺跡と共通し、円形の一つは泥岩（観察表では斑石）とされる。補修孔は、滑石、流紋岩製だけでなく、凝灰岩製にも認められ、上記の補修孔に対する評価は改める必要があるかもしれない。上でふれた盛岡市塩ヶ森Ⅰ遺跡では、十点弱の完成品と数点の未成品が出土した（（財）岩手県埋蔵文化財センター 1982）。土器は前期末より中期前葉の方が多く、耳飾は楕円形を主体とし円形らしきものも認められる。明瞭な縦長長方形の1点は粘板岩（他に1点）で、他に滑石（2点）、流紋岩（4点）製が見られ、意外にも最も少ないのは凝灰岩（1点）、蛇紋岩は最多の一つ（4点）で、明らかな未成品も2点含まれる。田野畑村和野Ⅰ遺跡は、沿岸北部の円筒土器圏と重複する遺跡で、玦状耳飾は9点出土した（（財）岩手県文化振興事業団 2004）。土器は前期後葉～中期前葉だが、耳飾はほとんどが楕円形（角張るものが顕著）で、滑石2点、粘板岩3点、頁岩3点、泥岩1点である。

石材について上記見通しに当てはまらない点が多く出てきた。上述のように、旧胆沢町大清水上遺跡は、滝ノ沢遺跡より古い大木5式土器を主とする遺跡で、11点出土した玦状耳飾は、1点頁岩の他は全て凝灰岩である。同じく秋田県上ノ山Ⅱ遺跡は大木4～5式土器を主体とするが、円形だけでな

く僅かながら楕円形や縦長長方形も出土している。50点のうち2/3が凝灰岩、残りが蛇紋岩と滑石である。蛇紋岩と滑石製に円形で補修孔を持つものも多く、また縦長長方形の2点は凝灰岩で、上記見通しに概ね合致しているが、凝灰岩製にも補修孔を持つものもあり、上で大木5式期円形の一つの標準とした841も凝灰岩で、何より在地化の時期は合わない可能性が高い。

滝ノ沢遺跡の様相から“搬入品として入手していた玦状耳飾を大木6式期に自作するようになったため、楕円形を基調としながらも多様化し、在地石材の未成品が多量に出土した”と解釈したが、石材の点ではそう単純ではなく他の遺跡に当てはまらない場合が多いことがわかった。滑石製なども未成品あるいは原石の状態で運ばれることもあるようだ。だが、大清水上遺跡などのように、大木6式期以前では在地石材で自作？していても形の変異がほとんどなく円形に作られたのはなぜだろう。なお、岩手県北部は円筒式土器圈に入るほど近いのに意外なほど三角形の玦状耳飾が出土していない。

参考文献

- 秋田県教育委員会 1988『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』下 秋田県文化財調査報告書第166集
 (財)岩手県埋蔵文化財センター 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第31集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第452集
 川崎 保 2004「玉の類型編年 玦状耳飾」『季刊考古学』第89号(特集縄文時代の玉文化)雄山閣
 國重佐夜子 2001「玦状耳飾りについての考察」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会
 (岩手県)遠野市教育委員会 2002『新田Ⅱ遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集
 高木 晃ほか 2005『岩手県立博物館第54回企画展図録 縄文北緯40°～前・中期の北東北～』
 日本玉文化研究会 2010「縄文時代玦状耳飾集成」『玉文化』第7号 日本玉文化研究会(連絡先:栃木県立博物館)
 樋口清之 1933「玦状耳飾考」『考古学雑誌』第23巻第1、2号 考古学会
 福田友之 2006「津軽海峡域における玦状耳飾り」『青森県考古学』第14号 青森県考古学会
 堀江武史 1992「玦状耳飾の分類と製作工具に関して」『國學院大學考古学資料館紀要』第8輯

2 遺物・遺構のまとめ

(a)縄文時代の遺物

第Ⅴ章に量と内訳を示した。土器は、後・晩期もあるが、前期末～中期前葉がほとんどで、大木6式中頃をピークとする。前節の検討で、大木7a式は今回調査区の南に多いという地点差が窺えたが、スス・コゲの付着を検討しても長胴形と球胴形の深鉢の用途の違いはわからなかった。土製品は、土偶と円盤状土製品以外は種類もはっきりしないものばかりである。土偶については、“窪み”の有無で前期と中期を分けられ、今回出土品のほとんどは前期末という腹案を持っているが、時間不足で部位別の集成を示すにとどまった(第368～369図)。石器・石製品は、玦状耳飾のみ検討し(前節)、他は一部の出土分布と石質組成を示すにとどまった(第370～380図)。分布は土器(第13図)と変わらない。石器は、剥片石器が少なく、磨石、特殊磨石、礫石錘等の礫石器が多い。黒曜石については原産地推定、石匙、磨石については使用痕分析を委託している(第Ⅶ章)。石製品は、未成品がほとんどで、勾玉と玦状耳飾、それに石剣類と思われるものを除けば、種類もはっきりしない。

(b)縄文時代の遺構

炉跡1基、焼土29基(第1号焼土は現代の可能性もある)、土坑27基、遺物包含層、雨裂1箇所が検出された。炉跡1基は中期前葉以後(後晩期?)の可能性があり、その他は縄文時代前期末～中期前葉の可能性が高い。ただし、雨裂が縄文時代既に形成されていたかどうかは定かではない。

・前期後葉～中期前葉(大木5式期～大木7b式期)

本遺跡の主体となる時期で、今回も大量の土器が、大木6式期なころ(Ⅲ期)をピークとして出